

■編著

深川 雅史 東海大学医学部内科学系腎内分泌代謝内科 教授

■執筆（執筆順）

深川 雅史 東海大学医学部内科学系腎内分泌代謝内科 教授
濱野 高行 大阪大学大学院医学系研究科腎疾患統合医療学 寄附講座助教
谷口 正智 九州大学大学院医学研究院病態機能内科学 助教
塩崎 雄治 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部分子栄養学分野
野村 嘉吾 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部分子栄養学分野
宮本 賢一 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部分子栄養学分野 教授
今西 康雄 大阪市立大学大学院医学研究科代謝内分泌病態内科学 講師
永田 友貴 大阪市立大学大学院医学研究科代謝内分泌病態内科学
稻葉 雅章 大阪市立大学大学院医学研究科代謝内分泌病態内科学 教授
岡野登志夫 神戸薬科大学衛生化学研究室 教授
山本 浩範 仁愛大学人間生活学部健康栄養学科 准教授
竹谷 豊 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部臨床栄養学分野 准教授
武田 英二 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部臨床栄養学分野 教授
瀬川 博子 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部分子栄養学分野 講師
網塚 嘉生 北海道大学大学院歯学研究科硬組織発生生物学教室 教授
長谷川智香 北海道大学大学院歯学研究科硬組織発生生物学教室
佐々木宗輝 北海道大学大学院歯学研究科硬組織発生生物学教室
松井 功 大阪大学大学院医学系研究科老年・腎臓内科学 助教
猪阪 善隆 大阪大学大学院医学系研究科老年・腎臓内科学 准教授
横山啓太郎 東京慈恵会医科大学腎臓・高血圧内科 准教授
井関 邦敏 琉球大学医学部附属病院血液浄化療法部 部長／医学部 診療教授
田中 元子 松下会あけぼのクリニック 副院長
三留 淳 東京慈恵会医科大学腎臓・高血圧内科
山本 裕康 厚木市立病院内科／院長
小岩 文彦 昭和大学藤が丘病院腎臓内科 准教授
前住 忠秀 昭和大学藤が丘病院腎臓内科
駒場 大峰 東海大学医学部内科学系腎内分泌代謝内科 助教
五嶋 玲子 東海大学医学部付属病院臨床検査技術科
角田 隆俊 東海大学医学部内科学系腎内分泌代謝内科 准教授
風間順一郎 新潟大学医歯学総合病院血液浄化療法部 准教授
加藤 仁 埼玉医科大学総合医療センター腎高血圧内科 講師
小暮 裕太 埼玉医科大学総合医療センター腎高血圧内科 助教
佐野 達郎 埼玉医科大学総合医療センター腎高血圧内科 助教
矢野 彰三 島根大学医学部臨床検査医学 准教授
松尾 浩司 新潟大学大学院医歯学総合研究科腎・膠原病内科
伊藤 明美 伊藤骨形態計測研究所 所長
中島 歩 広島大学病院再生医療部 助教
藤井 秀毅 神戸大学大学院医学研究科腎臓内科学／腎・血液浄化センター 助教

初版序文

腎臓は、ミネラルのバランスと骨代謝の維持に大きな役割を果たしている臓器である。腎臓の機能が低下する「慢性腎臓病（Chronic Kidney Disease；CKD）」では、それらの異常は必発であり、もっとも重要な合併症と考えられている。

本書は、名称こそ異なるものの、2003年に発行された『新しい透析骨症』の続編にあたるものである。それでは、この5年あまりの短い間に、どのような変化があったのであろうか？

その最大のものは、「透析骨症」「腎性骨症」ないしは「腎性骨異栄養症」から、本書のタイトルにもなっている「慢性腎臓病にともなう骨ミネラル代謝異常（CKD-MBD）」への用語の変更である。用語の変更は、概念が新しくなったことをはっきり示すために行われたもので、「骨の病気」ではなく「全身の病気」としてとらえられるようになった。

次は、CKDのムーブメントから続く、生命予後の重視である。したがって、新しい治療法に対して、これまでのように、リン、カルシウムや骨に関する検査の所見が改善するだけでなく、その結果として、心血管病変、骨折、そして生命予後を改善することが求められるようになった。さらに、そのような変化を反映したCKD-MBDに関するガイドラインが内外で発表されるようになったのも、大きな変化である。その結果、通常の発表でも、ガイドラインの目標値の達成率が議論されるようになった。しかし、この分野では、生命予後も含めた、高いレベルのエビデンスはまだ少なく、今後さらに努力していかなくてはならないだろう。

最後に、欧米に比べて導入が遅れていた新薬の多くが、最近わが国でも次々と使用可能になったことも大きな進歩である。これによって、予後やQOLが改善することは当然だが、経済的にもペイすることも検証しなくてはならない時期にきている。

本書が、このような現在から未来への変化を実感するのに少しでもお役に立てば、編者として幸いである。

神戸で10回目の桜を眺めながら 深川 雅史